日本近世前紀序説

中村直勝

第一説　時の歩み

一

時の威力に追われて日々刻々を勉めておるのが人間であり、時の威力のおかげで、生きておるのが、歴史の学問である。

もし、この世の中に「時」というものが無かったならば、どうなるものであろう。

「時」の動きがなかったならば、万物すべてに生死はなく、森羅に盛衰はなく、万象に栄枯はないはずである。〝時〟というものを、一体誰が創造したものか。どうして「時」というものが存在するのか。地球が動くから時が動くのか。地球の公転や自転を抑止したら、時は動かないものか。地球は動かなくとも、電子の自爆はあるものか。

そうではあるまい。どのような意味においても、動くということは、最高最下最大最小の意味において「一つの力」で起るものではない。それに対する何等の積み重ねがあって、初めて起ることである。積み重ねるということは「時」が進んだということであるから、「動く」ことは時の小車に乗ってこそ初まることである。

「時」というものの短かさは、どの位の短かさであろうか。極微の世界とか言う言葉で、「物」の量の極度の小ささを言うが、時の短かさはそれの何十億兆分の一であると言っても、言い表わせないほどの、微々小々であろう。もし時の短かさを観念し得る人ありとすれば、それは大聖であるまいか。

時の短かさは、どうしても認識することが出来ないのではないか。それ故に、時の短かさを認識する方法として、時の速さをもってすること

が発案された。一念三千念という言葉が、その一例である。ハッと思う一念の間に、三千の思慮が生滅するほど、時間のたつのは速い、と言うことであろう。量の大小を表はすに、ものゝ速度をもってする。

この認識の方法は印度や中国で発明された方便であった。光年の数で宇宙の広さを言うのもそれであろう。光線の速度で、宇宙の幅を言うのであるから。

二

考えてみると、そうした観念的に言っても意識の出来ぬほどの短い時が、刻々に重なり重なると、幾億光年という長い時が積み重ねられるのである。幾億光年の時間の力は、とうとう、微粒子から太陽系その他の天体をも創造し、それを微塵にも砕破したろう。微塵からまた次の有形物をも造ったであろう。微生物から、終に現代人間という絶大なるものまでに発展せしめた。

時の流れの恐ろしさをしみじみと思い、時の流れの忝なさに、しみじみと頭を下げる。その〝時〟の流れに追い廻されて、営々孜々と、稼ぎ働き勉めておるのが、いまのわれわれである。時の力に押されて、押し返す力もなく、押し返そうともせず、黙々と、時の歯車に乗せられ、時の歯車に喘いでおるのが、人間である。

三

その恐ろしい〝時〟という絶体力を積み重ね、積み重なることによって生ずる新らしい変化を、振り返って、何とか眺めようとするのが「歴史」である。鬼の言葉で言えば、歴史家とは、時の思恵で生活の資を得ておるものどもである。

その視点に立って、すぎし日を顧ると、いまから五六百年前に「時」の著しき活躍がある。その活躍が、どのような色調のものであるか、を見ようとするのが、本稿の狙いである。

四

室町花御所。

この言葉を吟味するとき、これから言わんとする日本近世期なるものゝ姿が、充分に把握出来るのではあるまいか。

室町幕府のあったところは京都御所至近の土地である。足利尊氏が、幕府を創めたとき、それを鎌倉に置くべきであるという要望があった時に、当時指導的な立場に立った禅僧の興禅護国思想に則って、それを排し、政令は必ず一途に出ずべく、政界は宗教界に引摺られるべきでないという強き政治思想に基いた一因と、もう一つ、足利氏は決して北条氏の後継者ではない事を、天下諸侯に告知する必要とから、京都の室町頭、持明院朝廷の隣接地に、柳営を構えてしまった。持明院朝廷を離しては足利氏は逆賊になるから、それを惧れて擁衛容易のところを稽えたからである。足利氏は自分の軍は義兵であり、新田義貞は凶徒であり、楠木正成は悪党であることを、常に弘布宣伝せねばならなかった。

それは、それまでの歴史に大きな時の累積があったからである。

鎌倉時代ならば、何もかも、「故右大将家」で片附いた。故右大将家頼朝の意志であるとさえ言ってしまえば、何事であれ、それが正理であると信ぜられた。もしそれに反する者あらば、御家人非御家人、公武社寺を問わず、それは政治を乱すものであるとして、堂々と処罰することが出来た。

ところが故右大将家の代理者であった北条執権は、終に人望を失って擯斥せられた。もし足利氏が北条氏に代って政権を握り、その後継者であるならば、〃故右大将家〃を看板にしてもよいが、足利氏は北条氏の亜流ではないと見得を切った以上、もう故右大将家を引合に出すべきでない。

それに加えて、後醍醐天皇と拮抗しなければならぬから、どうしても持明院統を足利氏の局内においておかねばならなかった。

何と言われても、鎌倉に幕府をおいては、一種の地方政権になってしまう。

室町幕府の地点は、その意味において、絶好の場所であった。

順逆の観念というものは、人間の附けた区別である。何れが正で、何れが偽であるか、という区別も、人間の附けた区別である。順が正であり、逆が邪であるという区別も、冷たく言えば、人間のつけたものにすぎぬ。

順逆正邪は人間の判断によるものである。とすれば、南朝北朝に向って、正偽の区別をつけたということは、人間が判断して附けたのである

から、それは反面から言えば、時という大きなものの中に、人間が介入した事である。

北畠親房は、『神皇正統記』をかいて、南朝の正統を理由づけるべく、「神器の所在」をもってしたが、それはまだ、正偽の別をつけるのに神意を借りて来たのであった。そこはまだ、たしかに中世的である。ところが、神器なくとも実力さえあれば、やがてそれが正朝であるべき事を、事実をもって示した。それが後光厳天皇以降の北朝である。これが近世である。武力という人間の力が、歴史の示した順逆を、破ったのである。

人間の威力がほの見え出した。神器の存在ということよりも、実力が――〝人間〟の力が、すべて決定するものであることを、明示したのである。

室町花御所の裏面に、花御所の主人公たる足利義満という〝人間〟の姿が厳然として、浮び出てくる。

五

政庁というものは、権力の所在であるから、何となく無味乾燥のように思われる。法権の前には、人情があってならない。政権の所在は、厳粛にして冷然乎、規矩井然たるところであるべきである。

花御所には、その名の示す通り、花草のいろいろが植えてあった。となると、室町幕府は、何となく個人住宅の俤がある。公的の官衙ではなく、将軍家住居の一局である。

それは、政治が法令の下で行われたのではなく、将軍家の都合勝手で、左右されたかも知れない、という推量を湧かさしめる。もっと甚しく言えば、将軍の家庭の事情で――女性の容嘴――正邪進退が決定される、ということを、暗々裡に見せておるやに思える。これもまた、人間の〝アク〟の強さが、作用しおる事になるのではなかろうか。

花御所の思想は、宮中の「壷」から来たであろう。さすが紫宸殿は正庁であるから、そのような事はないが、清涼殿になると、背後左右に、花樹を植えた内庭があった。藤壷、萩壷、梨壷、桐壷がそれであって、紫宸殿とは趣が違う。聖上の日常御暮しの場所であった。半ば以上、私的生活の加味された宮殿であった。

花御所が宮廷生活に源流を持ったということは、一面から眺めると、将軍家の公家化ということなって来る。

頼朝が、武士として最も惧れたことは、武家の公家化であった。武士が堅持しなければならないのは、尚武の精神である。それが文化の波に洗われると、軟弱化し、消え去って行くことであった。「文化」というものは、不思議な魅力のあるもので、粗野の人々には、力強い感化力を見せる。

武家が公家化することは、武士結紐の根本が破壊されることになる。何となれば、公家の組織は官位の組織であり、法治の精神である。それは主従の恩義で繋がれ、主君の人格に絶対を認める武家精神とは、完全に反蹠的な組織である。

武家の公家化は、武家自身の否定である。

文化は戦争を拒否し、平和を謳歌する。

仮りに、この世から戦争を完全に無くすれば、武士は無用の長物となる。

戦争は有ってはならないが、戦争が絶対に無くなるのは、強力無比の武士が厳在する時だけである。

頼朝の先見は、そこを洞察したればこそ、であり、幕府を〝武〟の存在し得べき新天地鎌倉に樹てたのであった。

それに対して、室町花御所が宮廷と境を接したということは、嫌でも応でも、武士の公家化を導き出すことにならざるを得ぬ。花御所の所在地は、足利幕府のためには悲しむべき宿痾であった。

戦争否定の将軍家幕府。

この明らかな矛盾こそが、近世期を生み出し、育て、且つ飾ってくれた原動力である。

同時に、この矛盾あるが故に、室町時代は面白いのであり、動いておるのである、その矛盾をどう解決つけるべきかに、この時代人の懊悩と努力とがある。人間性が高められたのである。

そこを探り出すことが〝歴史〟の面白さであり、且つ厳しさである。

矛盾なき世界は神仏の世界であり、矛盾に満ちた世界が、人間の世界である。

近世期の条件は〝人間〟が歴史を動かすことである。人間が〝時〟の世界に、お節介の手を加えることである。

六

人間が、人間の力によって、人間の道を切り開こうとするまでには、思いの外、長い〃時〃の積み重ねが必要であった。日本の歴史で言えば、少くとも神武天皇の御代から二千年の月日を要した。この間、神意仏心のまにまに、人間は殆んど自己に対して無批判に暮して来たのであった。やっと鎌倉時代になって、仏教の唱える末世末法の思想に嚇されて、発奮したのであった。それでもなお、浄土宗を初めとして、日蓮宗や禅宗のような新思想にしても、所詮は仏教から脱却すること叶わず、人間の力を神仏以上に押し上げるところまでには達しなかった。

そこえ、南北両朝の対立があった。国民思想は混惑した。是非善悪正邪の判断がつかなかった。天照大神の神意である三種神器には花が咲かず、足利氏や大内氏のように実力ある枝の方が栄えた。

国民の胸裡に播かれた〃人間〃の種は、恐らく、間もなく、芽を吹くであろう。

第二節　金銭の世界

一

日本の国が、天孫である皇室の手から離れ、国家の力を以って統制しなければならなくなったとき――推古、白鳳の時代――国家は法制を定めて国家と国民との権限を規定し、相互扶持の組織を明示した。国家は国民の生活を保護し保証する意味において、男女に土地を班給してその耕作使用権を附与した。国民はそれに応じて反別二束二把の租と、その外の附加税とを国家に納入せねばならぬ義務を負わされた。煎じ詰めると、国家財政の基礎は米穀であることを意味する。

尓来、一切の取引きは米をもってされた。和銅開珎以来村上天皇の御宇までに十二種の貨幣は鋳造されたが、それは中国に対する体面上と、ある限られたる取引上の必要とから、形式的に、極めて僅少の鋳貨を試みられただけで、国民の経済生活に役立つことはなかった。

例えば、土地の売買は必ず鋳貨をもってすべしという規定はあるが、奈良時代平安時代初期の土地売買券を見ると、土地何段を銭何十貫で売

却すると書いてあるので、民間にも相当の蓄銭があったかに見えるが、それは土地の売買――特に売ることを容易ならしめざる親心であり、土地の売得を不可能ならしめようとする内心である。土地の併呑を許すまい、貧富の差を作るまい、とする政策である。その売券を仔細に検討すると、鋳貨何十貫とあるその数量の文字は、形式的に、郷長か郡司の手で挿入してあるにすぎない。

実際の取引は米穀であった。

武士が起るに及びても、少くとも鎌倉武士は土地を所有しなければならなかった。所有地を〝所帯〟と言っておる。所帯なき武士は、幕府の統治内には加えられなかった。

二

王朝時代におけるわが国の耕地面積がどの位であり、人口がどの程度であったろうかは不明であるから、土地の収穫と人口数との釣合を知るに由なしである。王朝時代に多少の開墾田（はり田、治田）がありはするが、極めて稀であった。庶民間においては、思い切った人口制限が行われておったに相違ない。飢者は街頭に群集し、餓死者の骸は累々たるものであった。京都においてすら、それであるから、地方農村の惨状は言うに堪えなかった。

三

源平合戦は、その点において幸運な事件であったかも知れない。戦死者のおかげで、日本全体の人口何割かが減少した。それだけ庶民の口に流れる食糧は豊かになった。王朝末期の庶民は、源平相争うことによって、蹂躙される田畑の損害を悲しむと共に、武士の戦亡を冷眼視したかも知れない。歓呼したかも知れない。

ともかく、源平初期は、糧食と人口とのバランスが考えられた。故に、武士たらんする者は、必ず所帯がなければならなかった。

武士が所領に立脚したことは、武士の強味であったが、同時に、所帯が武士の足枷になって、終に武士の没落をも招来するのである。

四

武士の所得と、家族数とのバランスは、源頼朝の末期には、もう崩れて来た。それをどう捌くべきか。鎌倉幕府の難関であった。

承久合戦はその突破口であった。

鎌倉に味方した武士に対しては、恩賞として土地及びその収穫権を所有財産とすることが許され、宮方に属した将士の所有地を没収して、褒美として下附された。御家人の財政は潤沢になった。勿論、米穀の収入が殖えたことを意味する。

収入増加の御家人に取っては、それが却って不幸の胚子となった。

短時間でも戦場に立ったことは、質実なる平素の生活を弛緩せしむることになり、ふしだらくな風習に染まることになる。

承久戦後急激に武士の生活は、苦境に陥って来た。その苦境から救われようとして、武士はその身分、名与、家柄をも抵当物権として、町人から借銭をした。借米ではない。借銭である。

鎌倉中期になると、凡下（ぼんげ）——身分は町人であるが、有資産者である。商工業の徒であるが、金銭を動かしておる——の活躍が、著しく目立って来る。無尽（金貸業）が、鎌倉の街々に軒を並べた。驚くべき高利で金銭を貸す。普通で百文に対して月五文の利子であるから、年六割の利息である。それが法定相場であったのであるから、裏面では、どの位の高利を貪ったか、推知されるであろう。

五

幕府が庶民から徴収する租税も、棟別銭、壷別銭、矢銭、関銭といって、銭貨をもってする事になった。頼朝のときは兵粮米であったのに。

六

中国を中心とする東亜諸国には、年号というものがあって、それによりて政治に新らしい機運を醸し出しておるが、そのために撰ばれる文字には、どうしても、其時其時の要望が含まれる。それによりて国民生活にある種の指向が与えられる。政府の施政方針が盛り込まれる。

国民の日常が潤沢で、天下泰平であれば、一般人心は現状維持、現状の永続を希うであろうが、そのような極楽がこの世に実在するわけはないから、人の持つであろう理想は、決して現状ではなく、次元の世界にかかる。現在に最も欠けておることを補わんとする。

その意味において、年号の用字を観察して見ると、国民精神の一端が掴める。

例えば、平安末期、仏教が末世末法を説いた時代の年号は〃長〃〃久〃〃永〃が多かった。後三条天皇の延久に初まって、久の字のつくものは永久、久安、久寿、建久、元久、承久がある。永の字のつくものは永保、永長、天永、永久、元永、永治、永暦、永万、寿永、建永があり、長の字は永長、長治、長承、長寛等がある。

この間（一〇六九―一二二一）五十二の年号があるが、その中で、これらの文字は十九回に及びて使われておる。平穏な日が一日でも、一月でも続く事を希念した心の窓であろう。

鎌倉時代は〃建〃の字が多い。建久、建仁、建永、建暦、建保、建長、建治、建武の八回。特に初めの五度は三代実朝の時代に凝集している。末世を建て直そうとする希願と、健実潔白を旗印とした政治をやることを標榜したものである。平安末期の院政のような不健康な存在を排斥したものである。

南北朝は、時間的には短かい五十七年間であったが、貞和、文和、永和、弘和と〃和〃の字ある年号が四度もある。如何に無意義なる公武紛争を消滅さそうとする努力心が強かったか。南朝の興国とか正平とかは国民一般の繕望であったろう。

江戸時代になると俄然〃寛〃の字である。寛永、寛文、寛保、寛延、寛政がそれで、江戸幕府は極めて厳峻なる政治方針で諸侯万民に臨み、いささかの違犯をも許さないものであった。それを見抜かれまいとする幕府は、御寛大なる御政道であることを、売り物にしたからであるとも言えるし、万民からすれば、何卒御寛大にという悃願であるとも言えよう。哀願の声が聞える。

然らば、室町時代はどうであったろうか。

永の字も、永和、永徳、応永、永享、大永と目に附かぬではないが、それよりも著しいく目を射る文字に〃徳〃と〃禄〃とである。

永徳、明徳、宝徳、享徳、延徳と、享禄、永禄、文禄とである。

ここにある〃徳〃は決して徳望の徳ではない。所得の得の音通である。得富という名字もある。まだ徳富ではなかった。

つまり所得の増加と自分の立身出世を篤く念じ、福徳の身辺に聚まらんことを、熱望しておる心の綾であると言えよう。

七

かくして銭貨が社会経済の中心となったことは、裏返せば、武士の敗北であり、没落である。商工業者の抬頭である。

都市の勃興であり、農村の後退である。社会層位の大変革である。

近世期の進軍楽譜は、人生の福禄を念ずる人間の欲望である。有徳者が最も尊敬される世界の出現である。

有徳者交名が登録されたり、有徳銭が課せられたりする。資本家に脚光は当てられた。

資本主義と言う言葉はまだない。観念もまだ生れてはいないが、その事実は、この時代には顕著に見られる。

戦国群雄の中で、天下を統一する見込のあるのは四人である。

金貨本位制を採った武田信玄、巨万の金塊を擁した織田信長、銀貨本位制を立てた元利元就、精銭しか通用ささなかった小田原北条氏が、それである。

八

大資本家の出現。豊富な銭貨、その宝島はどこにあったか。

一つは対明貿易によって獲得したる中国貨幣であり、一つは新らしく銅鉱を発見して得たる銅、第三は悪貨を私鋳して、良貨と併用せしめた奸策の落し児、であった。

善悪両貨併用によって生ずる経済界の混迷を利用する酒屋土蔵、油座以下の座商らの進出は、目醒ましいものがあった。

そのために儲けた人々は、今後、どう発展するか。損害を被った者共は、どこに姿を隠してしまうか。近世期を彩る大きなテーマである。

九

金銭に豊かな有徳者以下の日常生活が、華美に流れるのは当然であろう。家庭生活の潤沢は、家具調度品の発達を招く。個人の日常が、嘗て見られなかった豪奢に発展した。

その反面には、必ず虐げられた民衆が潜在すべきは当然である。押圧された民衆は、いつか反撃の挙に出る。土一揆がそうであった。巧みに宗教味をからみ合せた宗教一揆が各地で育て上げられた。一般庶民に戦乱の緊張を味了さすことになり、戦乱に馴れさすこととなり、それが即ち戦国群雄兵力の温床となった。平和な世界は、富の偏在から破れるが、富の平均分配は、却って庶民をして安易生活に喰い足りなさを感せしめ、やがて平和を嫌悪さすことになる。

平和に不満を抱けば、戦乱に心を通わす。

人の心は、あわれあやなきものである。

一〇

大資本家の存在は、物資を遠隔に運搬することを可能ならしめる。資本家は、安きを買い、高きに売るものである。一文でも高価に売れる場所へ、物品を移動さす。越前若狭の麻苧が大阪に移され、四天王寺の資源となった。

東西南北の交通路が開拓された。日本全体が広うなったようでもあり、狭うなったようでもある。資本の持つ魔力であろう。

第三節　人間の慰楽

一

末法思想で威嚇され、他力本願で押圧されたことは、その時代人の精神を極度に削縮し、厭世的たらしめたが、人心は、それで反動的に奮起せしめられた。極端な悲劇は一種の笑劇である。極度の悲嘆は笑声となって表現される。

他力本願の信仰は、煎じ詰めれば、自力本願ではないか。

鎌倉時代の初めに、栄西が興禅護国を提唱したとき、道元は譬を並べて正蔵眼を説いた。自力――釈尊の心を体しておる筈の人間の眼力こそ大宇宙の秘奥まで覗き得べきものであるべきを教示した。

建仁寺建長等の寺号に含まれておる思想は、宗教は国家と相扶持すべきであることを求める心である。天壌無窮の日本において、末世滅法のあるべきでないことを立論した。

相模太郎北条時宗は神国日本の高価を知るが故に、断乎として蒙古使節の無礼を咎めた。日蓮は、更に進展して、天照大神という至高至尊の神祇に頼むことさえ、一種の他力本願であると観じ、唯だ、釈迦という人間が最後に説いた妙法蓮華経を信ずる心こそ、最高であると教えた。〝南無妙法蓮華経〟と合掌する人間の心が至高であるとした。自力本願である。法華曼陀羅を見ると、天照大神の名は、左側の中部よりやや下に小さく書いてある。

二

真言天台両宗は、人間の罪悪感を深く強調し、凡ゆる人間は、背負える罪業から、解脱しなければ往生極楽の本願は遂げられない、と言ってわれわれに、難行苦行を需め、罪障消滅をひたすら希願すべきを教えた。

従って人身は汚穢の固りであるから、そのような人間が慰楽を求めることは、以っての外の罪行である。一秒一瞬を惜しみて、罪障消滅に努むべきである。さなきだに罪障充満の人身に、肉食帯妻の許されるはずはなく、歓楽追求の許されるべきではない。一念専念、往生極楽を念じ念々刻々、弥陀の慈悲に縋るべきであると強要した。

すべての芸能慰楽は神仏に奉献すべきためのものであった。祭典法要は悉く神威仏光を称揚し虔謝するためのものであった。神明仏陀には百味の温食を奉奠すべきであるが、人間は一汁一菜しか許されない。一日一食一椀をもって事足れり、と規定された。

歌舞音曲は神仏報恩のために演ぜられるべきである。若し人倫界で許されるとするならば、それは僅かに帝王が、国家的大儀式の時においてのみ、演技することが許されるのであった。大臣以下が、もし演技を嗜むとすれば、国家的式典を飾るべき時に許されるのである。平素の訓練は、自己慰楽のためではない。

二

奈良時代になって、唐朝文化が輸入され、唐朝貴族の平素が模倣されるに及びて、詩歌管絃の遊楽が試みられ、詩歌の朗詠が習練されることになった。それでもすべては宮廷中心であり、帝王のためにする奉仕であった。

逆に言えば、歌舞音曲を演ぜしめ得ることが、帝王たる資格でもあった。

平安時代になって、臣下の中から摂政関白のような権勢者が現われると、その人々のために賀寿の宴が催され、その宴席の賑わいとして、歌舞が演ぜられた。近衛中将どころが、その舞人を勤めた。

この段階になって、漸くにして歌舞は、人間の手に渡されたが、まだしかし、月卿雲客の世界だけのことであった。

楽は射御数と併して貴顕紳士の教養学科であり、演技ではなかった。特に楽は、帝王学の真髄であるとして、至重至宝であった。

神代の物語に次のような事が伝えられておる。誰もが知っておる物語であるが。

天孫に三子があった。彦火火出見尊、火明命(ホアカリノミコト)及び火闌降命（ホスセリノミコト）であった。第三子が皇兄で、海幸彦と言われ、魚介の幸を楽しまれた。彦火火出見尊は皇弟で、山幸彦と言われ、野山の幸を楽しまれた。ある日、兄弟相議して、山海の幸を獲る道具を取り換えて見ようと言うことになった。山幸彦が釣具を借りて海辺に遊び、不運にもその釣針を失った。兄命に謝罪されたが、兄命はどうしても、あの釣針でなければならないと言い張って許されないから、弟尊は海神の宮まで行き、海神の女豊玉姫命の好意で、その釣針を探し求めて帰還、兄命にそれを返却された。その時、弟尊は奇端を示されたので、兄命は自分の言ったことの無理難題であったことを詫び、そのしるしとして俳優（ワザオギ）の真似を演じ、それでもって許しを乞われた。この火闌降命が、後世の隼人の祖神である、と言う伝承である。

奈良時代以降、天皇が大嘗会を行われるときに、犬鳴きの真似をするのが隼人の役目とされ、その由来を、如上の神話に組込んであるらしいが、これは争いに破れた者が、勝者えの服従を示すときの儀式である――世界的に共通する古代の習俗であるが――ことを示したもので、一転すれば、演技者は下賤者であるとし、奴隷の為す業である、と解されるものである。

演技者を一段下層者と見る風習であるが、自分の誠意を示すために、神明に対して践しき業を敢てして、神に誓ったのであった。

演技を神明に奉納したものであった。

三

中国古代において、帝王たるものの具備すべき資格は幾つかあったが、その中の大きな一条件は、四周の国々を威伏せしめることであった。慴伏させた国の国民は、勝った帝王の徴を讃えるために、歌曲を演ずるのであった。それが多いほど、その帝王の聖徴は大きいのであった。そうしたいろいろの古代習俗が積み重ねられて、歌舞音曲の専門家は、下卑者であるかの、社会通念が生れたのである。

それについて一つ考慮すべきは、前述したように楽（がく）の教養が、射、御、数よりも高位にされ、帝王は楽を嗜むことを、必須とした観念のあることである。

文化教養の最高は音楽に通暁することであった。

つまり音曲を身に具することは高級であるが、音曲を他人に見せて、それを生活の糧とすることは、下卑であると解したのであった。

当今でも、世界各国に通じて見られることは、宮廷附属の音楽師が、如何に特異な、華美な服装をしておるか。不思議であろう。

軍隊でも、軍楽隊の図外れたキラビヤカな服装は、何に基因するか。楽士が尊敬されたからであろうか。その逆ではないか。

四

新らしい天皇が、即位後の初の年に天神地祇に御食御酒を奉献される大嘗会という大祭がある。その国家的大祭祀の中心となることは、全国を悠紀（ユキ）と主基（スキ）の二地区に分ち、その両地区内で然るべき田地を卜定し、そこで祭典に用うべき用穀を播種することであるが、その田植に際し、苅取に際し、その地方の風俗歌を演奏せしめることがある。

恐らく、原始の時代から、農耕は風神雨神土神の温かき神助による外に豊穣は期すべくもないので、その希願のほどを歌謡にして、謡い上げ、謡い清める風習があった遺影であろう。そうした必要から、田植歌や苅取歌が伝承され、演舞された事は、敢て珍らしい事ではあるまい。

田楽なる民間舞謡が、偏く各地に存在したことは、かくして当然であろう。

五

仏教の伝来。その法要式典の次第作法。その中に必ず歌舞音曲が組入れられておった。東大寺二月堂の修二会に残る千年の姿は、寔に忝き歴史の俤である。あらゆる歌舞音曲の胚子であり、母胎であると思わるゝものが、六時の法要を通じて、充ち満ちて拝める。

大社巨刹で伶人楽人を養成しておった訳は、判る。南都興福寺、叡山日吉社、難波四天王寺はその一斑であり、長く近世期まで、存続してあった。

寺院生活が豊かになるに従って、寺院に止宿する僧侶の間において、彼等の慰楽のために、歌謡を編み出し、修法の余暇を楽しむものが生じた。正しき呂律を守っての音声は、洛北三千院が正式の道場であったが、それとは違って、俗臭を帯びた延年舞、風流踊りが、いつとはなしに発芽し、地方民間にも波及し、拡がった。

六

神社祭祀の時にも、神賑（かみにぎわい）として東歌（あずまうた）が奏せられた。帝王の権威が、神社の神威が、遥けき東北にまで及び、東北畏伏の民が、帝徳神徳を称える意味で、東歌が奏せられたのであろうが、それが、各地所在の民間社にも真似されて、鎮守の祭には、邑人工夫の里神楽が演ぜられた。猿太彦神と天鈿女命とが主要役者であった。それは、必ずしも、神代の昔、高天原において、岩戸隠の際、天鈿女命がたたらを跡んだ故事に則ったものであると、窮屈に解釈しなくともよい。山陰北越には、素盞男命の大蛇退治を演ずることが多い。これも必ずしも神代紀に素因ありとする必要はない。ただ、神代以来の伝承としておいた方が、人みなが安心して演ぜられ、楽しく眺められる効果を狙うたまでである。

逆に、その始源は民間人の発明工夫であって、神代紀そのものの発想源が、却ってここから由来した、と解してもよい。

何れにしても、神祇仏陀に奉献するための演技であった。

七

鎌倉時代になると、俄然、人間のための慰楽になった。仏教が一大転回をしたための結実である。

それまでの仏教は貴族宗教であった。信者は身分以上の布施を強いられた。造寺造仏の供養を果さなければ、往生は叶わぬと戒められた。

平安末期、滅法時代に達したので、造寺造仏の供養を果しても、五十六億七千万年の後世まで、往生は叶わぬこととなった。その上、貴族自身が殁落したので、権勢富貴を失い、仏陀への供養どころではない、自分自身のその日さえ、危うくなった。

貴族を檀那と仰いだ仏者の方で、方針を改めねばならなくなった。

一文の布施、一遍の念仏、それで事足りると言わねばならぬこととなった。いままでならば、職業が下賤であることから、往生の素願は遂げられまい、と卑しめた非人餌取や狩人漁夫までも、往生が可能であると説教し、否、それ以上、悪人だからこそ救済される資格が具わっておるのである、と言い出した。

西大寺叡尊や忍性は、その方面の大選手であった。川原に屯ろする非人何百人に、文珠菩薩像を描いて与え、それが往生の保証書でもあるやに教えた。その一証として、彼等に戒名を与えた。袈裟女、夜叉女はまだしも、甚しきに到ては薬師女、観音女、千手女、宝生丸、金剛丸、勢至丸、小法師、犬法師と言った仏様そのものゝような、名さえ附けてやった。彼等は決して諸仏諸菩薩と別個のものでない、と教訓し、浄行修行させた。

浄土教によって発明されたのは阿号であるが、それよりも一層徹底して、人間はそのまゝで、如来たるべきを説いたのである。人間尊重である。

八

彼等の中にあって器用なものが、もし、法要に際して、演技すれば、それが観世大夫であり、宝生大夫であり、金剛大夫である。

こゝまで進展すると、芸能は、神仏に奉献するだけのものでなく、人間の慰楽であり、人間自身の練磨である。

喫茶の風習が、そうであった。

その初めは、極めて高貴なる飲料として、神前仏壇に供えるか、天皇高僧の用にしか供しなかったものが、栄西によって、人間の健康保持——養生の薬剤であることが道破された。喫茶は人間の慰楽、人心の慰撫に供された。

喫茶の風習は佐々木導誉によって更に通俗化され、斗茶にまで発展させられた。喫茶することの歓びでなく、それによって勝負を争う賭の歓楽にまで、拡げられた。

九

『太平記』巻第二十四「天竜寺建立事」の中に、「この開山国師、天性、水石に心を寄せ、浮萍の跡を事とし給ひしかば、水にそひ、山に依り、十境の景趣を作られたり。所謂、大士応化の普明閣、麈々和光の霊庇廟、天心秋を浸たす曹源池、金鱗尾を焦す三級岩、真珠領（あぎと）を琢く竜門亭。三壺を捧ぐる亀頂塔、雲半間の万松洞、言はず笑を聞く粘花嶺。声なき音を聞く絶唱渓。銀漢に上る渡月橋、この十景を定め、石を集め、煙嶂の色を仮り、樹を栽えては風涛の声を移す」と言う記事がある。看過してはならない数行である。

何となれば、造庭造園が、全く人間の慰楽——というよりも、人間の遊びになって来たからである。

そもそも、造園は何の必要から起ったか、というに、それは東海の中に蓬萊嶋という仙境あるべし、とする中国の道教急想に基いて起ったもので、その秘区を、かくあらんかと現世に構築しようとする念が、造園となったのであった。仏教の伝来と共に、西方極楽思想が輸入せられ、その思想も加味せられ、彼岸の浄土はかくあるべきか、を構築したものが庭園である。庭園——嶋、は仙人の世界であり、仏陀の浄土であって人の住むべき所ではない。

それが鎌倉時代末になると、全くの変化を起した。〝禅苑〟と言われるものがそれで、園池の中から道教や仏教の観念は消えて、詩歌や文学の世界を構造することになった。天竜寺の開祖夢窓国師疎石によって、完全に過去と違った林泉が考案せられ、人間の感情詩念が表現されることになった。

これもまた人間慰楽の時代が来たことを示す一端であろう。

一〇

人間の存在が是認せられるならば、人間が、人間の歓楽を追求し、演出し、構築して、その慾求を満たそうとすることは、当然の帰終であろう。

人間の要求が、是認せらるゝことゝなると、人間否定の過去は破られてしまい、新儀が生まれることになる。

新らしい歴史が発芽する。新らしい文化層が開かれて来る。

第四節　人間の反省

一

人間の慾望が是認せられ、その慾求が許されるということは、〝力〟と〝金〟とが、人間の手に握られたからである。力と金との前には、神明仏陀が威厳を失うたのである。

形而上が後退して形而下が前進する。それが近世期の大旆である。

人間のあさましさは、慾求を無制限に慾望することである。満ち足りるということを知らないのが、人間の美点でもあるが、人間の業でもあるが。

それを取り去り、捨て去らなければ、成仏は出来ないと、仏教が強く戒めておるのは、耳を傾けるに足る哲語である。

人間の慾望を押え、制御すべき責務を持った仏教が無力になったので、それに乗じて豪華奢侈な人間生活が始まった。鎌倉時代末期にバサラと言う言葉が出来た。思い切った派手な生活様式のことである。佐々木導誉がその代表者であった。

人間を押えに押えて、罪悪汚濁の固りであるとしておくことも悪いことではないが、その圧力が弛むとすれば、人間の持つであろう慾求が無限に伸びる。田楽法師に巨万の富を投じても、悔いもしなかった北条高時は、必然的な存在である。

家居、服装、調度に華美を競い、田楽法師や傾城を坐右に侍らせて、誇りとした。

二

それに対する反省が現われなかったであろうか。現われなかったら、人間は悪鬼にすぎない。

さきに引いた『太平記』の天竜寺創立のところに、次の記事がある。（よみやすくするために文字を少し改めたところがある）

「武家のともがら、かくの如く、諸国を押領することも、軍用を支えんためならば、せめては力なき折節なれば、心をやる方もあるべきに、そぞろなるバサラに耽って、身には五色を飾り、食には八珍を尽し、茶の会、酒宴に苦干の費えをいれ、傾城田楽に無量の財を与えしかば、国費え、人疲れて、飢饉疫癘盗賊兵乱、止む時なし、是、全く、天の災を降すに非ず。唯、国の政なきに依る者なり……」

と道破しておる。国家の平和を守るために必要な武士が天下を塩梅し、そのための軍事税ならば、やむを得ないが、そうでない。バサラに耽っておるのでは、いまの天下に飢餓病者賊徒が絶えないのは、当然である。これは天災ではない。国家に政治欠如せるためであると、厳しく時弊を指摘し、痛罵しておる。

表面的な文字の遊びだけかも知れないが、それでもよい。これだけの反省があれば、人間は悪鬼にならないで済む。

豪奢の反面、その陰に悲泣する何百千万の犠牲者が、おるからである。

ところが、この反省が僧侶の間から起らなかったことに、大きな淋しさがある。宗教家のように、民衆に大きな感化力を有する人々から、この反省が湧かなかったのは、どうしたことであろうか。

興禅護国を叫んだ禅僧がいう〝護国〟の内容を検討して見ると、それは禅宗の興隆に役立つべき国家を守護する意であって、民衆と手をつないで平和国家を出現せしめ、それを擁護する意味ではなかった。新興仏教たる浄土宗を押え、天台真言の旧仏教を斥けることに力を注いだのであった。禅宗で仏教界を牛耳ることが目的であった。狭い仏教界のことでしかなかった。

亀山天皇、花園天皇、後醍醐天皇の帰依を一応得ることに成功すると、それで安心し、それに甘んじて、宗教界での活躍は鈍った。詩文章に意を注ぐこととなって、五山文学なる詞華は咲いたが、豪奢生活えの反省は見られなかった。五山文学の木板印刷は、看点を変えれば、最も豪

華なる文化ではないか。

緇衣が破れ、紫衣の袖が、宮廷柳営に飜がえった。

妙心寺開山関山国師が都門を去って美濃に身を潜めたのは、京鎌倉禅侶えの警声戒告であった。

朝廷が南北に併立したことは悲しいことであり、人心は、何となく不安であったろうし、世上万端に傾斜があったろう。正常な、健全な政治が行われるわけはない。

社会が何となく二分されたり、双立したり、畸形児的な存在であった。しかも、過去の権威は地に墜ち、成上り者の金力武力が、ものを言う時代が新らしく来た。人の力がすべてを決定する時が来た。将軍尊氏でさえ、親子兄弟の内訌のために、何の力も示し得ない時代であった。無法無主義無節操の直冬に、振り廻わされておった。

ここで、すべての人々は反省すべきであったろうが、内省しておっては、自己が滅亡する時代であった。世の中は亡べば亡びよ、何とかして自分一人だけは、栄えねばならない時代あった。

反省は意外なる方面に芽を持った。

民間文芸、民間芸能の分野においてである。

三

器用譜代の区別なく、在々所々で、民間人の手で、何の規約も制約もなく、気の向くままに興行された歌連歌は、その一っである。京田舎をこきまぜて、到るところで行われた。誰彼の見境いもなく、判者にならぬ人ぞなき有様であった。人間が、文芸の自由の天地に遊歩したのであったが、余りの無作法無節制では、却って面白しみが少く、楽しみが淡い。そこを悟ったか、ある種の規矩を作り、約束を結び、その規範の中において自己の天地を見出すことが、真の慰楽であることに気附いた。無制約に対する反省であった。

応安時代（一三六八―七四）になって『応安様式』及び『新応安様式』が規定された。

それを大きな軸物に仕立てて連歌の席に懸け、連歌の衆は、それを読みつつ、眺めつつ、様式に外れまいと努めて作歌したらしい。字引きと

首引きで歌を案出しておる成出者の姿が、偲ばれて、そぞろ哀れさを感ずると共に、この物知り顔をせぬ彼等の純真さこそ、近世期の色調であろう。嬉しい思いがする。

無作法に対する反省。人間生活に最も必要なることは、自己を反省せんとする、念慮である。それあってこそ、人間は禽獣に勝る、のであるまいか。

今川了俊によって『竹馬抄』が著わされた。民間文芸はかくあるべしという反省である。反省は進展の原動力である。

四

ここまで言えば、観世座の世阿弥の『花伝書』に言及すべきであるが、これは多くの人々によって、説き明かされてもおるから、再び言うの愚をさけて、これは人間反省の聖典であることを指摘するに止める。

五

人間の反省は、人心の解剖に繋がる。人間の心裡を分解して、それを接合すれば、人間の文学が生れる。最近代のように人間の姿をそのまま描出する自然主義にまで発展するには、まだ時間を要するが——もう少し人間自身が苦しまねばならないが——人間を神仏と対蹠した存在であるとして、描く技能を見せ初めた。人間の醜き心や、愚ろかな日常や、惨しめな旦暮を、〃社寺の縁起物〃という形式で描くことが、非常な勢をもって流行した。都鄙に亘って縁起物が好まれた。

一面から見れば——皮肉に言えば、絵巻物の詞書を書くことが、皇族貴族の収入を大いに助けたので、月卿雲客の方から、働きかけたことも大きな素因であったろう。後小松天皇前後の列聖が宸翰を染めて、社寺縁起の詞書をされたり、題箋をおかきになった数は、相当に達する。

三十六歌仙絵巻とか、三十六歌仙の扁額とかが、流行した。それは三十六歌仙の歌什に心を惹かれたためのものではない。歌道の〃先輩〃に対する憧憬であった。現代人の余りにも無学に対する反省であった。

歌仙絵が室町時代を通じて流行したことの意義は大きい。

六

百合若大臣とか福富草紙とか言った一種のロマンが、世に問われることとなり、謡曲、狂言のような、非実在的らしくしてしかも実存するであろう主人公を拉し来りて、人間を舞台に立たせて眺めた。反省した。

七

そうした時の流れが、凝集し、結集した文化は、茶の湯であった。

茶湯は完全に人間の修練であり、反省である。無秩序えの批判である。主客相互各別の責任を持ち、一糸乱れざる行儀作法を要求したものが茶湯の極意である。閑人の閑潰しではない。四民平等の世界ではない。主客順列、厳しき差格のある世界である。人間の深き反省である。

反省は修練となって、新らしい生命を生む。